

数学科にいた半年間。

題字にあるように、私は教育学部の数学科に留学しました。数学なんて苦手な私（完全な文系人間）が大丈夫だろうか……。私の沖縄留学は不安から始まりました。



☆初めての沖縄。初めて見る風景。

～はいさい！沖縄ストーリー、ついに開幕～。

新千歳空港約4時間弱。那覇行の直行便を使用しました。飛行機から窓の外を覗くと、エメラルドの海が一面に広がっていました。（左の写真参照）「これが沖縄の海なんだ！！」海への感動を抱きながら、私の交換留学は始まりました。

☆こんにちは沖縄！

……うわっ、やってしまった(ﾟДﾟ)

飛行機から降りると、「もわっ」とした熱気を感じました。最初に言い忘れてしまいましたが、その日（4月1日）の北海道（地元札幌市）の気温はなんと1℃。かなり厚着をしていました（笑）飛行場を出ると、汗が止まりませんでした。

☆4月5日 数学科としての半年間、スタートできるのか……？

数学科2年次との初対面。怖さと不安を持ち、琉球大学北口ローソンへ向かいました。私はワクワクした気持ちもありましたが、正直怖さがありました。しかし私はかなり人見知りです。人と仲良くなるのに時間がかかります。数学科の人が来るまでローソンの中で全く落ち着かず、とにかく歩き回っていました（笑）ここで知ったことが一つ。

「うちな一タイム」。

彼らは10分ほど遅れてきました。最初はなんとも思いませんでしたが、半年過ごしていくうちに「一時間遅れなんて普通。」この感覚が私の中で生まれていきました。

…さて、車内での数学科の皆さんの様子を見た私の心の中はというと…。



「男」「わちゃわちゃ」「テンション high!!!」
「肌の色黒すぎやしないか?!」「え、女
の子一人…?」「HY!かいゆし!」「顔濃くない?!」
「方言やばい!!!」

今まで体験したことのない楽しい雰囲気になり、飲み込まれ、私の緊張や不安は少しずつなくなってきました。「この人たちとならやっつけていけるかも。」そう思った一日でした。

☆海だ！ビーチだ！！基地戦跡巡りだ！！笑

真面目な話をしたいと思います(笑)そもそも私が沖縄に来たきっかけは「平和教育」に興味があったからでした。海やビーチパーティーなど、沖縄県だからこそ楽しめるものも本当にいい経験だったのですが、私はそれ以上に沖縄県の問題に関心を持つようになりました。琉球大には琉大特色講義というものがあり、沖縄県について学べる授業があります。私はその中の「平和教育学概論」「沖縄の基地と戦跡」を受講しました。授業の中でフィールドワークがあり、そこで沖縄県の基地と戦跡をまわることが出来ました。訪問場所は、平和記念資料館・ひめゆり資料館・対馬丸記念館・命どう宝の家などの資料館等、そして米軍基地やガマなどの戦跡でした。さらには授業とは関係なく、沖縄県の問題についての講演会(国会議員さんや元米軍関係者の話等)や歴史教育者協議会沖縄県大会にも参加しました。



沖縄に来て初めて知ったことや北海道ではリアルに考えられない沖縄の実態を、多くの場所へ足を運び、多くの世代の方とお話することで深く知ることができました。人と人のつながりがとても濃い沖縄県で、とても濃い経験をすることができました。正直なところ、半年間では足りないくらい、私の学びは止まりませんでした(笑)

☆沖縄の飯はうまい！！～私の半年間は

外食days☆～

沖縄県で私がおいしいと思ったものベスト3をご紹介します。

第3位 つけ麺



沖縄県ってつけ麺なの？そう思うと思います。
しかし、沖縄県はつけ麺のお店がたくさんあるので
す(^-^)
北海道のつけ麺と違うところは、麺の太さだ
と思います（あくまでも個人的見解です）。
麺はすごく噛みごたえがあり、すぐ満腹になれます(*
´艸`)
週に2回のペースでつけ麺を食べていました
(笑)本当におすすめです。

第2位 タコライス



王道ですね。タコライスです。新歓行事でも出てく
る沖縄定番名物です(^.^)
私はタコライスの上にオム
レツが乗っている「オムタコ」が好きでした。沖縄県
どこのスーパーにもタコライスの素が売られているの
で、家庭でも簡単に作れます(^.^♪
何度か食べに行っ
たのですが、一度食べたらやめられないおいしさで
す(笑)沖縄へ行ったらぜひ。

第1位 沖縄そば



本当に最高です。うどんでもなく日本そばでもな
く、沖縄そば。つるつとした麺は太くて噛み応えがあ
り、スープもとてもおいしいです。沖縄そばと一緒に
ジューシーという炊き込みご飯も付いてくるので
すが、それも本当においしいです。この二つがあればも
う何もいりません(笑)。それくらい、沖縄を代表する
郷土料理だと思います(*´ω`*)!

🌸沖縄に行って成長したこと

私は研究室員全員が認めるほどの「人見知り」で、人と関わることが大の苦手でした。沖縄に行ったら何かが変わるのかも、という小さな期待を持ちながら沖縄県へ行きました。最初の方にも記載しましたが、私が入った数学科の皆さんは先輩後輩関係なく、「みんな」で楽しいことをするのが大好きで、周りの人を楽しませてくれるたちでした。そして学科室の中はいつも「笑顔」と「笑い声」でいっぱいでした。本当に暖かくて小さなことも気にしない「なんくるないさー精神」が私にはとても新鮮で、人と関わることが楽しい毎日でした。北海道教育大学で過ごした一年間は、研究室外の人と関わることがあまりなく自分から進んで人と関わることが避けていましたが、沖縄県に行ってから色々な人と関わりたいと考えるようになりました。それもすべて沖縄県で出会ったすべての人のおかげだと思っています。毎日「笑顔」で過ごすことがいかに楽しいか、人と関わることがいかに面白いのか、そのことを真剣に知らされた半年間でした。琉球大学教育学部数学科の皆さん、私と関わって下さった他学科の皆さん、先生方、沖縄県で出会ったすべての皆さん、本当にありがとうございました。沖縄県、そして琉球大学に行って本当に良かったです。最高の半年間でした。

↑交換留学最終日。那覇空港にて数学科二年次との集合写真。



琉球大学での学びを通して

平成 28 年 10 月 28 日

地域学校教育専攻 臨床教育学研究室 5039 安田 洋幸

今回の琉球大学前期交換留学に際し、私は以下の目標を掲げて派遣に参加した。

①私は離島のへき地・小規模校を訪れ学校内の雰囲気や児童一人ひとりの様子を実際に目で見て知る中で、北海道のへき地・小規模校との比較をしたときにどのような違いや特色があるのか知りたいと思った。北海道教育大学釧路校にはフィールド研究というカリキュラムが生まれ、1年次から学校現場に入り授業観察ができるだけでなく前期には新入生研修もあり、へき地・小規模（小中併置）校にも行かせていただいた。実際に学校現場に足を踏み入れてみると、児童の楽しそうに授業に取り組む姿や行事等の練習に熱心に打ち込む姿を見て、教師としてのやりがいを感じることができた。しかし、児童の人間関係の問題や学習障害・多動性の子への教師の対応など、今日の学校現場で抱える問題点もいくつか垣間見えることも多々あり、このような問題は北海道に限らず、地域の風土や歴史等に関係し、学校によっても様々な異なる問題を抱えていると私は考えた。今回の琉球大学の派遣を通して、実際に学校現場に介入する機会はなかったが、多くの子どもたちと交流することができた。中でも、久米島を訪れた際に、部活のウォーミングアップを兼ねて道路を歩いている中学生と顧問の先生に遭遇した。すると、躊躇なく私たちのほうへ歩み寄り、「お兄さんたちどこから来たんですか？」と、まるで知り合いであったかのように話しかけてきた。最終的には、私たちが探していた次の目的地まで案内してくれることになり、このように話しかけてきた地元住民は多くいた。このとき、島民一人ひとりの距離がとても近く、みんなが家族のように感じられた。同時に、このような環境下で育った子供たちがとても素直で、島民の協力して仕事をこなす姿を見て育った子供たちは自己効力感がより高くなるのだと感じられた。

私は、多くの離島を持つ沖縄の地に立つ琉球大学でへき地・小規模校における教師のあり方を学び、これまでの経験と結び付けて将来へき地・小規模校に赴任した際に幅広い視野を持って対処できるようになりたいと感じた。

②琉球大学の特色科目の一つに「沖縄の基地と戦跡」という科目がある。戦争体験の風化が問題となる中で、沖縄戦から何を学び、それをどのように未来に伝えていくのかということを考え、流動的国際情勢の中で、沖縄の軍事基地を今後どうするべきなのかということを具体的な事実に基づいて戦争や軍事基地をめぐる課題について自分なりの意見を形成するという内容だ。フィールドワークとして沖縄戦の戦跡と資料館等をめぐる機会があり、アメリカ人留学生とともに戦跡巡りや英語での会話などとても貴重な経験をすることができました。

日本で唯一の地上戦が繰り広げられた沖縄には、多くの戦争の傷跡や実際に戦争を体験した方々の話が語り継がれている。私自身、修学旅行で沖縄を訪れた際に平和祈

念館やひめゆりの塔などを巡った。戦争の悲惨さを物語る写真や遺品等は今でも目に焼き付き、叫びや苦しみを訴えてくる。しかし、このような戦争の悲劇を知らない若者も年々増加していると聞く。戦時中を生き延びた方々がいなくなる一方で、私たちが次の語り手として実際にこの日本の沖縄の地で繰り広げられた戦争の悲劇を平和教育という形で後世へ語り継いでいくべきだと感じた。やはり小学校時と教える立場を目指している今とでは見方や感じ取り方も違うと思う。また、過去だけを見つめ直すだけでなく、今も沖縄県民を悩ませているアメリカ軍基地問題についても放っては置けない。戦後70年を迎えた今だからこそ、学校現場でも平和教育をより多く取り入れ、二度と戦争をしないと誓った日本を守り継いでいく責務が私たちには課せられていると感じた。

③北海道には「アイヌ文化」という特有の文化が存在する。私は、一年次夏期集中講義でアイヌ語・アイヌ文化について学んだ。アイヌ音楽には「ムックリ」という特有の楽器が存在し、音楽に合わせて踊りを踊る風習がある。一方、琉球王国という独自の文化を持つ沖縄には、我々の知らない歴史や風習が多く存在し、今も一部の地域では伝承されていると聞く。特に私が興味を抱いたのは、沖縄の唄と踊り（それに関連した沖縄特有の楽器）である。沖縄には沖縄（琉球）・古典民謡があり「三線」「胡弓」「三板」などの楽器が使われ、歌詞は方言で書かれ、島民の日常や恋を唄ったものなど幅広くに及んでいるようだ。

このように、地域によっていろいろな文化が存在し、それに伴い言葉や楽器なども独自の変化を遂げている。そして、若者たちによってこれらの文化が継承されているのだ。私も彼らの一人として伝統ある文化を継承すると同時に、文化を継承する中で新たに見えてくる歴史や先人たちの知恵などを学ぶことができたと思う。

幼いころから島の民謡（唄や踊り）と隣り合わせの生活をしていた私にとって琉球文化が当たり前であり、北海道にきて互いの独自文化に触れあうことで改めて地域の良さが感じられた。

琉球大学での学びを終えて、半年間は本当にあっという間だったが、その限られた中で自分のやりたかったことを実現できたことで、今回の留学が自分にとって意味のあるものだったと感じ、より広い視野で物事を捉えられるようになったと私自身実感している。私の住んでいた地元と沖縄の文化の違いと共通点にも気づけ、異文化理解への興味がさらに湧いてきた。

平和教育や伝統文化について得た知識も、今後どのように生かしていくかが重要であり、釧路に戻った今、多くの学生と共有してより学びを深めていけたらと考えている。また、今回このような貴重な経験をさせて頂いた琉球大学、先生方、学生、地域の人々、そして両親に感謝したい。







琉球大学における活動報告書

5118 村上 修平

私は琉球大学において主に平和教育、基地問題について力を入れて学習した。琉球大学に行く以前からこの2つのテーマについてしっかりと学びたいと考えていたので私にとって非常に充実した半年間の留学だった。琉球大学は北海道教育大学と異なり、多数の学部がある総合大学であり教育学部以外の授業も履修が可能であった。そのため普段では受講できないような授業も受けることができ、毎日が本当に学びの連続だった。先程も述べたように、平和教育、基地問題についてどのような学習活動を行ったか報告したいと思う。

まず、平和教育について述べたいと思う。私自身今まで平和教育という言葉は聞いたことがあったが、それが具体的にどのようにして行われているのかなど疑問がたくさんあった。おそらく北海道では平和教育というものにあまり馴染みがないだろう。そのような中、琉球大学での平和教育では主に沖縄戦について学習した。沖縄戦が行われていた当時の映像や証言を参考にしながら講義が行われた。講義の中では沖縄出身の学生と交流する機会が多くあり、たくさんの意見を聞くことができた。意見を聞いていく中で沖縄の学生は自身の地域についての歴史を理解し、どうなってきたのかなど平和教育に対する意識が高いことにすごく驚いた。そのような中で半年間を過ごし私自身、沖縄では今現在でも戦争は終わっていないように思えた。民家の上を昼夜関係なく飛び回る米軍の飛行機。コンクリートに埋まった銃弾がそのままになっていたり、地下には大量の不発弾があり国道を封鎖して不発弾処理の作業。そのような光景を目にし、また学生同士の交流の中から同じ日本なのにどうして北海道と沖縄でここまで平和教育に対する違いが生まれるのか疑問に思った。確かにそれぞれの地域で地域色というものがあるかもしれない。だが沖縄から学ぶ平和教育というものは多くあり地域を関係なくして学ぶべきなのではないかと感じた。

次に基地問題について。琉球大学には「沖縄の基地と戦跡」という特色科目がある。実際に辺野古や普天間飛行場に行ったり、沖縄の新聞社の方が講義に来てくださったり、ニュースの世界でしか見たことない場所に実際に行って講義を受けることができたのは本当に貴重な経験だったと心から思った。平和教育の部分でも述べたが、昼夜関係なく飛び回る飛行機の騒音、住民へのストレスは計り知れないだろう。これは平和教育にも関わることであるが、基地問題にも関わることだ。平和教育と同じで北海道で基地問題について真剣に考えたことはどれだけあるだろうか。だが、私は半年間沖縄で過ごし、さまざまな面で考え方が覆され他人事とは思えないようになった。この実際に現地に行かないと経験できない部分を経験でき、今後それをしっかりと活かしていかなければいけない。ただ平和教育、基地問題に取り組むのではなくこの経験を最大限生かしたいと思う。

これまで学習のことについて述べてきたが、もちろん休日は離島に行ったり、海で泳いだり沖縄をとことん楽しんだ。特に離島へは毎週のように行き原付バイクで島を巡ったり、現地の人たちと交流したり本当に貴重な体験ができた。何と言っても沖縄の人は温かくて本当に楽しい思い出ばかりだ。この留学制度を利用して沖縄に行き、半年間過ごせたことは私にとって本当に貴重な経験であり、財産になった。





H28年度 琉球大学交換留学活動報告書

地域・環境教育専攻 健康教育学研究室2年目

5119 後藤 彩希

私が琉球大学への交換留学を希望した一番の理由は、北海道から一番遠く、親も友達も知っている人が誰もいない、食や文化、気候が全く違う場所で半年間生活してみたかったからです。また、自分が生きてきた20年間とは全く違う文化の中で、同じように生きてきた同じ年代の人と関わり、友だちになりたかったからです。琉球大学では教育実践学専修という学科に入り、30人中自分を含め4人以外が全員沖縄出身という環境の中、毎日たくさんの刺激を受けながら半年間を過ごしていました。実践のみんなは、とにかく優しくて明るくて面白くて、学科全員が家族のように仲が良かったです。いきなり来た私に壁を作らず暖かく迎えてくれました。毎日授業が終わると、海やご飯、カラオケや映画、買い物、公園、陸続きの島まで行き、星を見たり、一緒にご飯を作ったり、課題をしたり、将来の話をしたり、土日はやっぱり海で泳いだり滝で遊んだり、ペンションをしたり、寮に帰るのは寝る時と授業のものを取りに来る時だけ、というくらい充実したとても濃い毎日を送っていました。そして何よりみんな自身が沖縄のことが大好きで、沖縄の方言、料理、素敵な場所、自分の友達の話、家族の話、沖縄戦の話、基地の話など、私の知らないことをたくさん教えてくれました。沖縄の伝統行事である、ハーリーと一緒にやったり、エイサーを見に行ったり、慰霊の日には、平和記念公園に行きました。沖縄料理もたくさん食べました。実践のみんなは授業に対してもとても真剣だったので尊敬できる仲間です。私が半年間、同年代の仲間からたくさん学び刺激を受け、毎日充実し、楽しい時間を過ごせたのは実践に入ったからだと思います。たくさんの感謝を伝えたいです。その他にも、一緒に沖縄に留学したメンバーで、沖縄でしかできない体験をしてきました。離島は、渡嘉敷島・久米島・石垣島・竹富島・波照間島・津堅島に行きました。沖縄の海は本当に青く、透き通っていて、砂浜は真っ白でサラサラで、少し潜れば青やピンク、黄色、紫、黄緑、黒、白の魚たちが泳いでいます。サンゴも色とりどりで、水面に浮いて空を見ると梅雨の時期以外はほとんどの日が晴天で青い空にもくもくの白い雲が浮かんでいて、時間が過ぎるのを忘れてしまいます。離島の海はもっと綺麗で、ウミガメと泳ぐことが出来ました。私が一番好きな久米島のはての浜の海は言葉では表せないくらい全てが綺麗でした。離島では、みんなで原付や自転車を借りて、何のあてもなくぶらぶらしたり、島の暖かい人たちに助けられながら、のんびり過ごしていました。また、沖縄は町中や道路のすぐ隣に米軍基地があり、アメリカの文化の影響を受けているので、とても新鮮でした。授業では、平和教育・沖縄の基地と戦跡・総合表現という授業をとり、実際に沖縄戦の体験者に話を聞いたり、沖縄戦や米軍の基地問題について学びました。同じ日本で起きていたこと、今もまだ解決していない決して他人事では済まされない多くのことを知り、今まで何も知らなかった自分が恥ずかしかつたのと同時に、授業を受けて感じたこの気持ちをこの先も忘れてはいけないうし、もっと自分で調べ、知っていかなければならないと強く思いました。

私は沖縄に留学したこの半年が、自分の人生の中でとても意味のある半年間だったと思

います。半年の間に出会った人、見たもの、感じたことは一生忘れることはなく、沖縄に行く前と行った後では自分の世界観や価値観が変わりました。これは、ただ旅行に行くだけでは意味がなく、半年間琉球大学で授業を受け、毎日沖縄の人と密接に関わりながら生活してきたからこそ得られたものだと思います。また、私が沖縄に行っている間にモットーにしていた「一日も無駄にしない」ということも達成できたと思います。もう一つ沖縄に行っ
てよかったことは、後期に琉大から釧路校に来ている 10 人と 1 年を通して仲良くなれた
ということです。とにかく、沖縄に留学して私は、時間の大切さと人の温かさ、人生は一
度きりなので、自分のやりたいことをたくさんやるべきである、ということに身染みて
感じました。また、沖縄に行きたいです。

琉球大学活動報告書

琉球大学教育学部自然環境科学教育コース留学

5127 高野 奏理

北海道教育大学釧路校 地域・環境教育専攻 地域社会と環境教育研究室所属

～南国の島、沖縄での半年間～

私は岩手県で生まれ、高校までずっと岩手で暮らしてきましたが、なぜか小学生の頃から沖縄に憧れ、絶対に沖縄に住むと決めていました。しかし、大学は北海道に決まり、沖縄とは程遠いと考えていた矢先にこの沖縄交換留学のことを知り、このチャンスを逃してはいけないと思い、四年間のうちの半年を沖縄で過ごすことに決めました。

私がこの半年間の沖縄留学で学んだことは、大きく三つあります。まず一つ目は、琉球文化についてです。方言やしきたり、行事など、沖縄の人たちは昔からの文化をととても大事にしています。お盆は日本本土とは少しずれていて、今年の旧盆は八月一五・一六・一七日でした。この三日間にも、それぞれ名前があります。その中で、最終日のご先祖様を送る「ウークイ」を友達の実家で体験させてもらいました。この「ウークイ」の日には、打ち紙というあの世のお金に見立てた紙を燃やし、ご先祖様があの世でも困らないようにとお祈りするのです。初めての経験だったし、とても貴重な体験でもありました。このほかにも、沖縄伝統芸能のエイサーもたくさん見に行きました。全島エイサーという一番大きいエイサーのお祭りでは、大迫力の踊りを見ることができました。また、友達に三線を弾ける子がいたので、教わって簡単な演奏もできるようになりました。沖縄の文化は本当に魅力的であり、素晴らしいものです。教員になったときには、この文化の素晴らしさを子どもに伝えることができたらいいと思います。

二つ目は、平和についてです。平和と一言で言っても、沖縄にとっての平和の意味はたくさんあります。基地の問題だったり、米兵の事件だったり、日米安保条約だったり、アメリカンスクールに通う子どもたちのことだったり、そして今でも語り継がれる悲しい過去のことだったり。私は、沖縄の基地と戦跡という授業を受講し、沖縄で起こった悲しい戦争の事実と、基地問題の現状について、主に学びました。また、この授業の中で、アメリカの大学生二十人と一緒に戦跡を巡り、英語でコミュニケーションを取りながら、平和について考える機会がありました。日本人だけの話し合いならこれまで何度もやったことがあったけれど、アメリカの方々と意見を聞いたことがなかったので、とても貴重な意見でした。今まで戦争とか平和とか、自分には全く関係ないと思っていたけど、これをきっかけに、自分のこととして考えられるようになりました。

三つ目は、沖縄ならではの遊びです。私は雪国育ちであり、冬の遊びはたくさん知っていましたが、夏の遊びと言えば海やプールくらいしか知りませんでした。梅雨が明け、夏本番になると、島人たちはたくさんの遊びを教えてくださいました。橋から飛び込んだり、滝に打たれに行ったり、キャンプファイヤーをしたり。極め付け沖縄らしいと思ったのは、ビーチパーティーと言って、海で泳いだ後にバーベキューをしたり、花火をしたりする遊びです。夜は波の音を聞きながら、満天の星空を眺めてゆっくりとした時間を過ごすこともありまし

た。遊びの中からも、自然環境の違いを実感することができました。

振り返ってみると、ここには書ききれない程の学びや気づき、思い出が詰まった半年間でした。ここで築いた人とのつながりは一生大事にしていき、これからの生きる糧にしていきたいと思います。最後に、留学を快く後押ししてくれた両親、半年間を共にした8人、沖縄で出会った人たち、行きたくても行けなかった仲間、そしてこの交換留学制度を作ってくださった田丸先生に感謝です。ありがとうございました。





2016年4月4日に沖縄に到着してから、9月1日に北海道に戻ってくるまでの約5ヶ月間で私は主に、沖縄の米軍基地について学ぶことができた。まず、米軍基地について、結論から言うと、何かこの問題の解決策が見つかったわけでも、明確に基地について賛成、反対の意見ができたわけでもない。しかし、沖縄に行くまではまるで他人事だったことが、「日本で起きている大きな問題」として、日本人として考えなくてはいけないこと、知らなければいけないことだと感じた。ある意味、これが一番の成果かもしれない。北海道や、他県ではなかなか見ることのできない金網に囲まれた街、そんな街のなかで生活し、自分自身が身を持って当事者となることができた半年だった。そもそもこの考えが間違えなのかもしれないとも思える。なぜなら、米軍基地は先にも述べたように「日本で起きている大きな問題」だからだ。本来であれば、北海道にいるときから当事者だと感じているべき問題だと考える。沖縄の米軍基地問題ではなく、日本の米軍基地問題であると認識を改める必要がある。日本の米軍基地の約70%が沖縄にある。有名どころで言うと、嘉手納飛行場、普天間基地、高江のヘリパッド、キャンプシュワブ、キャンプハンセンなどが挙げられるだろう。一般的に基地は危険なものだと認識されている。それは米軍による実弾演習による被害や欠陥機と呼ばれるオスプレイによる事故の数々、米軍関係者による暴行行為などが原因だろう。たしかにこれらは米軍基地がなければ起きなかった事故、事件だ。しかし、米軍基地がもたらす恩恵というのは一般にはあまり知られていない。まずは、軍用地料と呼ばれる、米軍基地内に敷地があり、名目上その土地を貸している地主には国から助成金のようなものが払われている。また、基本的に基地の周りの街は活性化している。辺野古のキャンプ・シュワブ周辺にはアップル・タウンと呼ばれる、キャンプ・シュワブがあったからこそ成り得る街がある。実際、そこに行くまでその存在は私も知らなかった。街の中を歩いて見ると、所々の壁に英語で文字が書かれている。かつては、多くの米兵がこの街に訪れ、たくさんお金を使っていたそうだ。この街を整備したのも、米軍で、住人が整備を指揮した、アップル中佐に感謝の意を込めて、街をこの名前にしたそうだ。住民のなかにはもう一度昔のように、米兵を街に呼び込み、街の活性化を願っている人もいるそうだが、街全体で意見が二分しているため、なかなか声をあげられない状況だという。このように、お金やインフラの件もあるが、文化の面でも、たくさん影響を受けている。ありとあらゆる所で目にする、沖縄料理のタコライスはキャンプ・ハンセンがある金武町が発祥だ。お土産として定着しつつある琉球ガラスは、米軍統治下時代に、米軍が飲んだコーラなどの空き瓶を溶かして成形し直したものが始まりだそうだ。マイナスのイメージが多い米軍基地だが、悪いことばかりではないというのが以上のことからわかる。しかし、危険なものには変わりがない。だからこそ、この問題は複雑で難しい問題なのだ。先生の言葉を引用しながら言うと、今まで何十年と悩んできた問題に対して、完璧な解決策がパッと出てくるわけではない。しかし、だからといって思考をやめてしまうのは間違っている。身近な問題として、常に頭に置き、様々な方面からの意見や情報を手に入れ、いずれは自分の明確な意見を持つことが大切だと考える。また、それを教育現場にでたときに、児童生徒たちに同じように考えを持ってもらえるように指導することが、私たち、琉球大学派遣組に求められていることだと考える。



琉球大学での活動報告

北海道教育大学釧路校 地域学校教育専攻 特別支援教育研究室 5015

琉球大学教育学部 特別支援教育専修 F020097 加納美波

私は半年間、琉球大学でたくさんの人と出会いたくさんのことを経験し、たくさんのことを学びました。その中でも特に、私の中で印象に残っていることがあります。それは、私が所属していた特別支援教育専修の活動で、学生が企画し、学生だけで運営する『あめんぼキャンプ』という聴覚障害・肢体不自由者とのキャンプです。8月の12日から14日の3日間沖縄県東村のつつじエコパークというキャンプ場で特別支援教育専修の数十人の学生と他学科の数人、そして聴覚障害・肢体不自由の子どもたち数人とその兄弟たちでキャンプをしました。

キャンプでは子ども一人に数人の学生が担当し一緒に遊んだり食事をしたり、活動の補助をします。私の担当した子どもは21歳の肢体不自由の女の子でした。彼女は子どもたちの参加者の中で最年長で子どもと表現するのは間違いかもしれませんが、体はとても小さく、ずっと車椅子での活動でした。ただ座っているだけでも足が硬直し、体が椅子からずり落ちたり、足が変な方向に曲ることが何度もありました。普通に話すことができず小さくかすれた声で彼女は、私達に伝えたいことを伝えてくれました。3日間車椅子を押してあちこち移動し、ご飯は口元へ運んで食べさせてあげ、着替えやお風呂は3人がかりでやりました。トイレには行けないのでおむつをして定期的にテントの中で変えました。手足があまり動かないのでズボンをはいたり、服に腕を通すなどの一つ一つの行動が彼女にはとても大変で、健常であることを当たり前だと思っはいけないと改めて思いました。キャンプの中の活動で、手を動かすことができないのでクラフト制作は棒をくわえてこれはここに貼ってほしいと指示し学生が張り付けたり、キャンプファイヤーのダンスは学生が車椅子を押してくるくる回ったり手をつないだりし、川遊びでは浮き輪に乗って浮かんで遊ぶなど3日間私達が少し補助するだけで、他の子どもたちと同じように楽しんでいたと思います。

私は教育大でも琉球大でも特別支援を専攻していて、いろいろ学んでいるつもりでした。少なからず障害児と関わることもありました。しかし彼女と出会って、自分がいかに今まで狭い世界にいたのかということを感じさせられました。

これは沖縄に行かなくてもできることなのではと言われてしまえばそうかもしれないが、沖縄に行ったからこそ彼女に出会うことができ、たった3日しか過ごすことができなかったが来年も行ってまた会いたいと思うほど彼女が大好きになり、たくさんのことを気づかされた。そのことだけでも沖縄に行ってよかったと思います。

もちろん、他にもたくさんのことを見て感じて、考えてきました。船に乗ったのもあんなに透き通った海を見たのも、ゴキブリを見たのも初めてでした。海の向こうに友人が新しくできました。この経験が直接将来に必ずしも役に立つわけではないと思いますが、この経験が将来の視野を広くし、私の考えを豊かにしてくれると思っています。

私は前期期間、琉球大学での交換留学に参加し、沖縄でしか学ぶことの出来ない文化や歴史、基地問題などたくさんのことを学ぶことができました。北海道とは何もかもが違い、同じ日本なのにここまで違うのかという経験もたくさんできました。

琉球大学では、子ども地域教育コースに所属させてもらって、このコースでしか受けることの出来ない授業もとることができ、その授業が私の沖縄での生活の中で一番心に残っています。学生が主体となり名護の羽地地区の小学生と先生方、地域の人たちの協力のもと、大きなプロジェクトを成し遂げることができました。この授業では色々なアイデアを出し、みんなで検討し合いながら進めていったのですが、クリエイティブなアイデアがたくさん出たり、私が想像もしなかったようなアイデアが出たりと、私が今までに出会ってきた人たちと違っていたところが多く、とても刺激を受けました。きっと、沖縄に行っていなかったら、このように思うことも、もっと自分もみんなのように自分の考えをはっきり持たないといけないと思うこともなかったと思います。それだけ自分ももっと頑張らなければいけないと思えるような活動に参加することができたことが、一番心に残っています。この活動を乗りきることができたから、もっと自分は何かできるのではないかというように自信を持つこともできました。

また、琉球大学の特色科目である沖縄の基地と戦跡について学ぶことの出来る講義も受けることができました。ニュースなどで基地問題が取り上げられていますが、沖縄に行くまではやはりどこか他人事のように感じている自分がいました。ですが実際に沖縄に半年間行ってみると、当たり前のように大学の真上にオスプレイが飛んでいたり、寮の近くで低空飛行して騒音がひどかったりと、基地問題を身にしみて感じました。基地なんてなくしてしまえばいいとはじめは思っていましたが、基地についての講義を受けたり、その基地で働いている家族のことを知ったり、基地で働く親を持つ子どもの話を聞いたりしているうちに、安易に基地反対とは言えないのかなと、自分の考えにも変化があり、沖縄に行っていなかったら芽生えることのない感情が生まれました。この講義の先生が、基地問題のことを忘れないということが大事だとおっしゃっていたので、これからも考え続けていきたいです。

授業以外にも、沖縄の景色、自然、海、食、文化、歴史などたくさんのことを見たり聞いたり、自分の足で行ってみたりとたくさん新しいことを学ぶことができた半年間でした。新しい人間関係の輪も広がり、たくさんの人たちにお世話になり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この交換留学に参加して心からよかったと思っています。今回の交換留学でできた出会いを大切に、この経験を生かしていけるよう、これからまた頑張っていきたいです。そして、また何かの機会があればぜひ沖縄に行きたいです。